

四月の保育

生活訓練

倉橋 惣三

保育の方法の基礎は幼児の生活にある。保育の究極の任務は訓練にある。生活を無視した訓練は、眞の幼児保育にならない。訓練を忘れた生活尊重は、正しい幼児保育であり得ない。生活訓練は、その正しい要諦をもとめてゐるもので、従つて、保育の最も本質的な要項である。

生活訓練を、方法の方からいへば、**躰ける**といふことになる。その結果に就ていへば**躰け**である。近時、國民學校でも幼稚園でも躰けが重んじられ來つてゐるが、即ち、他の言葉でいへば生活訓練の尊重に他ならない。

訓練といふといかめしい。しかし、要するに、自然の行動に放任しないことである。そこに訓練の意味の第一段がある。放任しない以上、外から指導してゆかなければならない。指導するには、指導方向が定まつてゐなければならぬ。同時に、外からの指導である以上、その指導には力——教育的權威——が伴はなけ

ればならない。それがなくては、方針だけあつても指導を實現することは出来ない。この方向の一定と權威とが生活訓練の意義の第二段をつくる。さて、そうして出來た結果は、つまり習慣である。躰けのついた形である。そこに、生活訓練の意義の第三段があるのである。方向の一定は即ち、躰づけとなるし、權威は其の躰づけの破れたり、みだれたりするのを防ぎ、又壓へ、又律してゆく力になる。そこで一定の習慣が出来る。

新入園児は、生活訓練の點で三種類の型に分類出来るであらう。一、家庭に於て生活訓練をされてゐないもの、二、されてはゐるが眞に教育的に正しく訓練せられてゐない子、三、既によき生活訓練をうけてゐる子。

擔任は、このそれ々に對して、適切な處置を採らなければならぬ。一類と二類とに對して大に苦心のいるのは勿論である。しかも、三類と雖も、それは家庭生活の訓練で、幼稚園でこそ與へられる生活訓練ではない。そこにやつぱり、大きな苦心がいる。幼稚園でこそ與へられるといふのが、**社會生活訓練**であることは言ふまでもない。

更に、家庭で一應の生活訓練を受けてゐる子どもが、幼稚園では、もうそのまゝにして置いて安心のものかといふと、必ずしもそうでない。生活が全く變つて來る。そこに、家庭といふ狭い生活、社會的作用を受くることの少ない生活で出來てゐる習慣が、みだされてゆくことがあるとしなければならぬ。殊に、幼児が

初めてぶつかるあの社會生活は、相當雜然たるものである。幼児の生活に動搖の起るを免れないであらう。

但し、此の動搖は、習慣の上からは好ましいことではないが、必ずしも悪い結果をのみ持ち來すとは限らない。そこから、新しい訓練の機會も捉へられるのである。新入園児の生活訓練の第一要義は、こゝにあるともいへる。

さて、以上を基本論として、實際に入る。もと／＼生活訓練であり、常に生活の全面に互るものであつて、局部的に考へられるものではない筈である。しかし、そう、一時に全面をねらふことはむづかしいから、段々に進めてゆくとして、訓練のねらひどころを立案する必要があらう。系統的保育案の實際に擧げてあるのは即ちその立案であつて、つまり、先生の方の計畫である。幼児の方は、もつと／＼廣い生活をしてゐる。それにつれて、廣い訓練がたえず行はれてゐなければならぬ。たゞ、その中で、その時々、擔任の計畫の重點をどこに置かうかである。各週に、たゞこれだけの生活訓練をしてゐればいゝといふやうな譯のものでは勿論ない。そんなことを考へる人が萬一あつたら、それは、訓練をしてはゐるといつても、生活訓練をしてゐるとはいへない。この點は、こんな要項のやうなものを擧げた以上、假りに誤解ないやうにして置く必要を感じる。

そこで、四月の欄を見ると、新入園早々なか／＼いろ／＼のことがある。が、要するに、幼稚園といふ新しい生活へならせて

ゆくことに他ならない。従つて、まだ、ほんどうの意味で訓練を訓練としてする程のことではなく、あの、謂はゞふら／＼してゐる子どもの心と行動とを、好ましい方へ向けてゆくだけのことであらう。入園早々訓練としてし過ぎると、却つて、幼稚園生活に――生活の部分々々でなく幼稚園といふものに――慣れることを妨げたりすることにならう。

従つて、大體、一々こちから仕向けてさせてゆくことで、そのさせ方が一定してゐれば、日から日へ、週から週へ、つまり訓練されてゆくのである。たゞへば「朝會つた時の挨拶」の如きでも必ずそうすることゝ言ひ聞かせるといふよりも、先生が先づする。次の朝もする。次の次の朝もする。いつの間にか、幼児の方からする。といつた風に進むのであらう。

それから、幼児に正しく生活させるといつても、個人的にさせると限らないことが多い。幼稚園の全體的生活のきまりといふものが先きにあつて、その中で習慣づけられるといふことが多い。假令は用便の正しい習慣の如き、幼稚園のさだめとして、大體の時間的規律が立つてゐる時、幼児達は、自然とその規律に従つて習慣づけられるのである。歸りの仕度、辨當の時のことなど、いづれも、みんなでする中に出来てゆく訓練である。たゞ、その中で、みんなといつしよになれないものには個人的訓練の手加減が必要にならう。

このみんなといふことは、幼稚園の生活訓練の一重要點である。個々の行動が、そのものとしてよく出来るか否かといふことの外に、みんなといつしよにしてゐながら、みんなといつしよに

出来ないこと、いつしよにしようとしないうこと、いつしよでなくて平氣であること、更にいつしよでないことを楽しんでゐるかの風のあつたりすること、こゝに却つて重要な訓練上の問題があるのである。

但、これを以て眞に一齊劃一行動の訓練とのみ解してはならぬ。進んでいつしよになれるかならぬかの點で、つまり、社會性訓練の最初の出發點となるものである。一齊に揃ふかどうかがいふ形式ではない。そういうふことは、もつと後の問題であらう。

入園早々訓練されるといふと、なんだか幼児に無理を強ひるかの感をもつ人もあるかも知れない。その訓練が無理のものでつたら無理であらう。しかし、幼児は、訓練されることによつてこそ、眞に幼稚園生活の快さを味はせられるであらう。幼児は案外生活のきまりが好きである。生活訓練を楽しく感じさせること、これこそ、新入園児訓練の第一の要點であらう。即ち新入園期によき其の時期に順序正しきといふ意味でのよき訓練を受けることは、後の幼稚園生活全體の訓練を受け易からしめる事になる。入園直に訓練の強制をするのが、いけないと共に、入園早々だからといつて、無訓練の時期の如く経過させるのも、最もよくない。

但、斯うは申すものゝ、實際はどんなに骨の折れることかと敬意を表す。しかも亦、それだけに、新入園當初こそ、保姆諸君にとつても、年々の最好訓練期であらう。

自由遊戯

上遠文子

はしがき

毎朝、「おはやう」と幼児を迎へる。子供達の自發活動は自由遊戯となつて、私達におかまひなく働きかける。働きかけられた私達はそれに一生懸命反應して幼児の生活に飛込んでゆく。

幼児の生活全部であり、保育の基礎である自由遊戯を、私達はともすると保育の一部分と見て、保育案の片隅にかたづけてしまひ、學校の放課時と同じものに誤解しがちである。

私達はその現れた自發活動を上手に指導し、又種々な遊戯も此方より提供し、幼児の生活をより楽しく又より豊富にしてゆきたい。そこで、この貴重な自由遊戯をどう指導し誘導していつたらよいかと云ふに、私共は先づ自分を幼児の氣持に引もどし幼児の世界に入りこみ、それから年齢、季節、場所によりそれ／＼工夫してゆかねばなりません。理論は理解出来る。しかし實際接してみれば、そこに疑問あり、煩悶ありなので、充分工夫し研究し經驗を重ねてゆかねばならぬわけでありませう。

さて、具體的の保育案に入つてゆく。

四月櫻の花も春風にそる／＼ほころび始め、新しい園児を迎へる。幼稚園生活に馴れぬ幼児、活動力のまだ乏しい幼児を前にして、私共は幼児の活動力を引出して、自由に自分で表現出来る様に導いてゆく事を考へなければならぬ。其處に保姆の知識と手